

140年祭(2026年)には「かぐらづとめ」をだれでも見られるようにしよう！

—「元初まりの話—人類の未来へ向けての『救済の歴史』」を読む—

『みちのとも』2022年10月号に新企画「教学研究の扉」《第1考》として、「元初まりの話—人類の未来へ向けての『救済の歴史』」(橋本武人.元天理大学学長.本部員)という文章(二段組で8ページ)が出ています。「この連載企画は、親神様の深い思惑が込められたこの道の教えを、あらためて追及するうえでの契機・一助とするべく、様々な視点から教学・教理の考察を試みるものである」とあって今後の展開が楽しみです。

さて、《第1考》「元初まりの…」は「八千八度の生まれ替わりを経て五尺の人間に成長」という「元の理」の話から、人間疎外や自然環境の破壊という現代世界の問題を考察し、最後にその解決策として、「かぐらづとめ」に言及するというスケールの大きな内容になっています。

今回はこの文を読み、「かぐらづとめ」の意味を考えてみました。

「立教の元一日のいわれ」と「たすけづとめの理」をよく了解させるため、教祖によって明かされた「元初まりの話」は、親神様の十全のご守護のもと、「泥海」・原始の混沌(カオス)から人間の原型(プロトタイプ)ともいべき最初の生命体が創造される話と、その原型が世界(コスモス)の形成とともに今日の人間に成長するまで、どのように育てられたのかという、いわば前・後半の話に大別される。……

ここでは、五分で生みおろされた最初の生命体が、三度の出直し、八千八度の生まれ替わりを経て五尺の人間に成長するという後半の物語、特に「九億九万年は水中の住居」「六千年は智慧の仕込み」「三千九百九十九年は文字の仕込み」という、その全体的な時間の流れの3区分が、人類史における古代・中世・近現代という時代区分といかに関わるかを、「水中」「智慧」「文字」という言葉を手がかりに、その象徴的な意味を糺(ただ)し、ひいてはこの壮大な物語が現代人に対して秘めている意義をたずねてみたい。(「教学研究の扉—第一考—元初まりの話」橋本武人、『みちのとも』2022.10月号.P22)

「元初まりの話(元の理)」の内容は確定していない

「元初まりの話」は、おふでさき六号にごく簡単な内容で書かれています。その後明治14年以降に、教祖の命により何人かの教弟がそれをまとめたのですが、山澤良助氏が書いたものについて「“それでよい”と仰せにならなかった」という話が伝えられ、教祖がどこに不満を持ったのか、現在も明らかにされていません。参考に『天理教教典』の「元の理」を提示しておきます。橋本武人氏もその点を考慮してか、『教典』以上の内容には触れていません。

元来、その最大の問題は、教祖は“こふき”を作れと御命じになった。山澤氏が筆を執ってお目にかけたが、それでよい、とは御受納にはならなかった—と申し伝えられています。その点から考えますと、仮令、良助筆十四年本が探ね得た最古の“こふき”話であったにしろ、それが“こふき”話の基準であり、本末の姿であるとは断じ得ないのであります。それは一つの試作とは考えられるが、教祖のもとめられる“こふき”であるとは、申し得ないのであります。又、“それでよい”と仰せにならなかった点が、その何れにあったのかも不明でありますので、お話全体が間違っているのか、部分的に思召に叶わなかった点があるのか、それも不明なのであります。（『こふきの研究』P10. 中山正善. 1957. 道友社）

最初に産みおろされたものは、一様に五分であつたが、五分五分と成人して、九十九年経つて三寸になつた時、皆出直してしまい、父親なるいざなぎのみことも、身を隠された。しかし、一度教えられた守護により、いざなみのみことは、更に元の子数を宿し込み、十月経つて、これを産みおろされたが、このものも、五分から生れ、九十九年経つて三寸五分まで成人して、皆出直した。そこで又、三度目の宿し込みをなされたが、このものも、五分から生れ、九十九年経つて四寸まで成人した。その時、母親なるいざなみのみことは、「これまでに成人すれば、いずれ五尺の人間になるであろう」と仰せられ、につこり笑うて身を隠された。そして、子等も、その後を慕うて残らず出直してしもうた。

その後、人間は、虫、鳥、畜類などと、八千八度の生れ更りを経て、又もや皆出直し、最後に、めざるが一匹だけ残つた。この胎に、男五人女五人の十人ずつの人間が宿り、五分から生れ、五分五分と成人して八寸になつた時、親神の守護によつて、どろ海の中に高低が出来かけ、一尺八寸に成人した時、海山も天地も日月も、漸く区別出来るように、かたまりかけてきた。そして、人間は、一尺八寸 から三尺になるまでは、一胎に男一人女一人の二人ずつ生れ、三尺に成人した時、ものを言い始め、一胎に一人ずつ生れるようになった。次いで、五尺になつた時、海山も天地も世界も皆出来て、人間は陸上の生活をするようになった。

この間、九億九万年は水中の住居、六千年は智慧の仕込み、三千九百九十九年は文字の仕込みと仰せられる。（『天理教教典』P28. 1949〈昭和24〉年. 天理教教会本部）

「『九億九万年は水中の住居』『六千年は智慧の仕込み』『三千九百九十九年は文字の仕込み』という、その全体的な時間の流れの3区分が、人類史における古代・中世・近現代という時代区分といかに関わるか」を橋本氏は具体的に記しています。この分類に約3ページ、この文章の半分近くを費やしています。そして、「近現代」の問題として、自然環境破壊、人間疎外、自己中心主義を取り上げています。現代の問題を「元初まりの話」の「九億」とか「六千」といった非常に長いスパンで考えるのが、この文のツボです。

橋本氏は3区分を、

【古代…水中の住居】— 狩猟採集生活の痕跡が残る25万年前から今から5千年前までの人類史の、あるいは、40億年という遥かに膨大な生命の歴史の大部分を占める期間。

【中世…智慧の仕込み】— 仏陀が出現した紀元前5世紀に端を発し、近代化が始まる15世紀までのおよそ2千年間。

【近現代…文字の仕込み】— 自然科学の発達に伴うさまざまな改革・革命を経て、「神中心から人間中心の生き方」へと転換。としています。

【古代…水中の住居】

近年の科学的な研究が明らかにする人類の歴史は、ホモと呼ばれる種族が類人猿と分岐したといわれる650万年前まで遡ることになるが、ここで言う「古代」は、狩猟採集生活の痕跡が残る25万年前から始まり、およそ1万年前に農耕牧畜生活へ移行した結果、大河の流域に古代帝国の文明が栄えるようになった紀元前3千年、今から5千年前までの、人類史の大部分を占める期間になる。それゆえ、人類史における古代は、40億年という遥かに膨大な生命の歴史の大部分、つまり「九億九万年は水中の住居」の期間に対応する。

狩猟採集生活はもとより、農耕牧畜の生活になってからも、古代人の暮らしは大自然の懷に抱かれて営まれていた。それは自然の環境に従い順応して生きなければならない暮らしであり、いわば自然中心の生き方であったと言えるだろう。

人間になる以前の生命体は、九億九万年という途方もなく長い期間にわたって「水中の住居」、つまり水の中に溶け込むように、水という周囲の環境と一体化して暮らしていた。やがて、その生命体が陸上の生活をするようになり、五尺の人間にまで成長してもなお、アニミズムの学説やトーテム崇拝の痕跡に見られるように、人間が自然環境と一体化している「一元論的世界観」、天然自然をあるがままに受容する「肯定的世界観」が古代人の精神文明であった。（「元初まりの話」P23）

【中世…智慧の仕込み】

次に、人類の精神史、思想史の観点からみる「中世」は、この自然世界を超越した世界を想定したプラトンと、この世は移ろいやすく人生は儚(はかな)いと悟って現世を否定した仏陀が出現した紀元前5世紀に端を発し、その500年後に人間性まで否定したイエスを加え、その後ルネッサンス（文芸復興）とリフォーメーション（宗教改革）という二つの「R」を契機に近代化が始まる15世紀までのおよそ2千年間を指している。

「宗教の時代」とも称される中世に生きた人々は、大自然の背後にあって、その運行を司る神、超自然的な存在を想定すると同時に、人間の罪深さ、人生の儚さの自覚から現世を否定するようになり、救いを「あの世」（天国・極楽）ないし「次の世」（来世）に求めて、自然中心から神中心の生き方へと転換していった。中世人の主たる関心は、救いを求めてひたすら神の恩寵にすぎるか、あるいは超自然的な世界、神との合一を求めて悟りを啓くべく修行に励むことにあった。

（「元初まりの話」P24）

【近現代…文字の仕込み】

さて、「近現代」という最終段階へ向かって最初に舵を切ったヨーロッパでは、自然を「発見」し、人間を「発見」したルネッサンスが中世から近現代へのターニングポイントになり、人々は「神も尊いけれど、人間も同じように尊い存在である」ことに気づき始める。／ 同じ15世紀には羅針盤の発明による地理上の発見、16世紀には活版印刷術の発明と密接に関わり合った宗教改革、17世紀には科学革命による啓蒙主義の台頭と市民革命、18世紀には蒸気機関の発明による産業革命等々、自然科学の発達や科学技術の進歩に伴うさまざまな改革・革命を経て、「神中心から人間中心の生き方」へと転換した。19世紀末には、F・ニーチェの「神の死」宣言を契機として、現代の世俗的ヒューマニズム、「神なき人間中心主義」の時代に至っている。……／ かくて、現代という時代に生きる私たちは、西洋近代に始まる科学文明の恩恵に浴し、何ごとも人間中心に展開していく風潮のなかで暮らしている。／ 人間中心であることは、人間以外のもの、つまり古代や中世で中心を占めていた自然や神を蔑ろにする傾向があり、その結果、人間の生存を脅かす自然環境破壊や、人間中心を謳いながらその実、人間の尊厳が失われる人間疎外の現象を引き起こしている。／ 要するに、人間中心主義の生き方を貫き、これを人間関係に持ち込むと、自分以外の人間（他者）に対する思いやり、社会全体に対する配慮を欠落させた自己中心主義に陥ることになる。（「元初まりの話」P25）

人間疎外

1916年、H・フォードはT型フォードの大量生産を目論み、自社の工場にベルトコンベアー方式の組み立てラインを導入。それから20年後の1936年、C・チャップリンが制作した映画『モダンタイムス』は、近代化を促進した機械化・機能分化の進展とともに工場労働者の仕事はますます単純化され、物を作る主人公としての人間が、逆に自らが作った機械に支配されて、物を作る喜びや働く喜びも奪われ、人間性そのものが失われていく人間疎外の状況を、彼特有の笑いとペースを交えながら見事に描いていた。（「元初まりの話」P26）

3区分の最後に、近現代の問題を列挙したあと、『モダンタイムス』を例に、人間疎外の問題に触れています。人間疎外という言葉はドイツの哲学者ヘーゲルの用語を引き継いでマルクスが使い、それが一般化したものです。ここでは自然と人間との関係から論じ始めるマルクスの用例から人間疎外の意味を確認しておきましょう。

マルクスは、この疎外Entfremdungという用語をヘーゲルの『精神現象学』（1807年）から継承し、またフォイエルバッハの、神が人間の善性を客体化した発明である限り、それだけ人間は貧しくなる（「キリスト教の本質」）という思想も取り入れて、経済学用語に鋳直した。（ウィキペディアより）

人間は自然との物質代謝によって生きている

人間は呼吸し、酸素を取り入れ、二酸化炭素と水を排出する。また、食物や水を摂取し、尿や便として排泄する。他方、自然の側も、排出された二酸化炭素を食物の光合成をつうじて酸素に変換する。また、尿や便は土壌を肥沃にし、植物の育成を促すだろう。なによりもまず、人間は、このような自然とのやりとりなしには、生きていくことができない。／ マルクスは、このような人間と自然とのやりとりのことを、人間と自然との物質代謝と呼んだ。人間は、ほかのあらゆる生命体と同じように自然の一部であり、なによりもまず、この物質代謝をつうじて自らの生命を維持している。／ だが、人間が必要とする自然とのやりとりはそれだけではない。体温を保持し身体を防護するために衣服を作ったり、食べるために食料を栽培したり、安全な生活領域を確保するために住居を作ったりする。このような活動のさいには、人間たちはただ自然を摂取するだけでなく、自然にたいして働きかけ、それを変形し、利用している。つまり、自然との物質代謝を円滑におこなうために、自分の行為によって、自然を変容させている。だから、このような活動は、人間が自然との物質代謝を規制し、制御するという意味で、人間と自然との物質代謝の媒介だということができる。／ だが、この場合もやはり、その複雑さや多様性によって区別されるとはいえ、ほかの生命体の活動と共通の性格を持っている。たとえば、ビーバーが枝や泥でダムを作るという行為も、ビーバーと自然との物質代謝の媒介であることには違いない。人間も動物も、自らの行為によって自然との物質代謝のあり方を制御し、それを正常に保つことによって自らの生命を維持しているのである。（『私たちはなぜ働くのかーマルクスと考える資本と労働の経済学』P32. 佐々木隆治. 2012. 旬報社）

労働は、人間と自然との物質代謝の意識的媒介であり自由な行為だったのが、賃労働はその自由が否定された、疎外された労働

【古代…水中の住居】の時代のように、人間も他の生物と同じような部分が多いときには、疎外は起きず、【中世…智慧の仕込み】【近現代…文字の仕込み】になるに従い疎外が生じるようになったということでしょうか。

人間による物質代謝の媒介とほかの生物によるそれとは決定的な違いがある。というのも、人間による物質代謝の媒介は、意識的におこなわれるからである。これにたいして、ほかの生物による物質代謝の媒介は、本能的におこなわれるにすぎない。／ たとえば、鳥は、人間が家を建てるのと同じように、巣を作り、自然との物質代謝を媒介している。だが、この活動はあくまで本能にもとづくものでしかない。つまり、鳥は巣を作るうという意志を持って自覚的にこの活動を遂行したのではない。鳥は、生まれながらに持っている本能にしたがって巣を作ったのである。／ しかし、人間はそうではない。たとえば、人間が家を建てる場合、彼は家を建てるという意志を持ち、自覚的にこの過程を遂行しなければならない。人間は、家を実際に建てはじめるまえに、家についてのイメージをいただき、このイメージを意識的に実現しようとする。しかも、一時的に意識性を発揮するだけではなく、目的を達成するまでのあいだ絶えず意識性を働かせなければならない。そのような意識的行為の結果として、はじめて現実には家が建つのである。つまり、人間が労働するさいには、まず構想を持ち、それからこの構想にもとづいて行為し、これを実現する。だから、人間による自然の物質代謝の媒介はすぐれて意識的行為であり、したがってまた知的行為である。（『私たちはなぜ働くのか』P33）

現代社会においては、労働の自由とは、職業選択の自由のことだと考えられることが多い。しかし、マルクスにとって労働の自由とは、なによりも労働における自由のことを意味した。人間が労働するさいには、自由に目的を設定し、この目的の実現を意識的に、自由に追求する。このような労働の自由な性格は、各人が自分の個性を自由に発展させることを可能にするだろう。人間が労働にやりがいを感じることができるゆえんである。／ もちろん、あくまで労働は、人間と自然との物質代謝の媒介であり、まったく恣意的に目的を設定し、気ままなやり方でこれを実現するということはできない。いくら意識的な行為であるといっても、人間が動物の一種である以上、生命活動の一環として労働はおこなわれなければならない。／ 労働の目的や手段はこのことに大きく制約される。しかしながら、人間は労働をつうじて物質代謝そのもののあり方を変えていくし、また、自然の力を利用しながら、その媒介の仕方も変化させていく。だからこそ、人間は労働することにやりがいを感じ、労働によって自己実現することができるのである。（『私たちはなぜ働くのか』P37）

賃労働は疎外された労働である ……労働一般を考えれば、労働は自然との物質代謝の意識的媒介であり、自由な行為であった。ところが、賃労働においてはそうではない。使用価値を生産するという面からみれば賃労働は相変わらず能動的な意識的行為にはほかならないが、他方では、賃労働者はすでに労働力を売り渡してしまっており、生産手段にたいして資本とするようにして関わり、自分の労働を資本の機能としておこなうことを強制されている。つまり、彼は意識的に労働するにもかかわらず、その労働を自己の目的にしたがって自分の労働としておこなうことができない。このように自由が否定され、労働者にとって苦しみとして現われる労働のことを疎外された労働という。賃労働は、労働する個人からみれば、疎外された労働以外の何物でもない。（『私たちはなぜ働くのか』P110）

人間疎外とともに、近代化の負の所産である自然環境の破壊は、20世紀半ばになると、大気、河川、海洋、そして土壌等の汚染がますます酷くなり、人体にまで悪影響を及ぼすようになって初めて、このかけがえのない地球の生態学的な危機として意識されるようになった。R・カーソンは、強力な殺虫剤や農薬が無制限に散布され、その毒性が食物連鎖や生体濃縮のメカニズムを通じて人間の生存を脅かしている現実を訴えた。それに刺激された有吉佐和子は、さまざまな汚染物質が複合することで一層大きな被害をもたらすことを指摘し、当時の省庁における縦割り行政を批判した。（「元初まりの話」P26）

人間疎外の後、橋本氏は現代の問題として環境破壊に触れています。2020年に発行された『人新世の「資本論」』は、「人類の経済活動が地球を破壊する「人新世」=環境危機の時代」をテーマにして、50万部近くが出ていて、現在も売れ続けています。新書とはいえ、400ページ近い内容も堅めの本でこれだけ売れるというのは、それだけ環境問題に対する社会の関心が高いということだと思います。ではこの本にはどんなことが書かれているのでしょうか。

人類の経済活動が地球を破壊する「人新世」=環境危機の時代。気候変動を放置すれば、この社会は野蛮状態に陥るだろう。それを阻止するためには資本主義の際限なき利潤追求を止めなければならないが、資本主義を捨てた文明に繁栄などありうるのか。（「BOOK」データベースより）



集英社新書
SHUEISHA SHINSHO
写真／矢吹健巳

人類の経済活動が地球を壊す「人新世」の時代。未曾有の豪雨やスーパー台風、異常な熱波。未知の危険なウイルスも、自然の乱開発で広がった。気候変動もコロナ禍も、資本主義が犯人だ！

2021 新書大賞 supported by Chuokoron-shinsha

45万部突破!!

危機の時代の処方箋! 第1位

第1位 齋藤幸平

SDGsに騙されるな。地球も、人も壊される。人類の経済活動が地球を壊す「人新世」の時代。未曾有の豪雨やスーパー台風、異常な熱波。未知の危険なウイルスも、自然の乱開発で広がった。気候変動もコロナ禍も、資本主義が犯人だ!

経済思想家・ドイツチャー記念賞受賞者

人新世の「資本論」

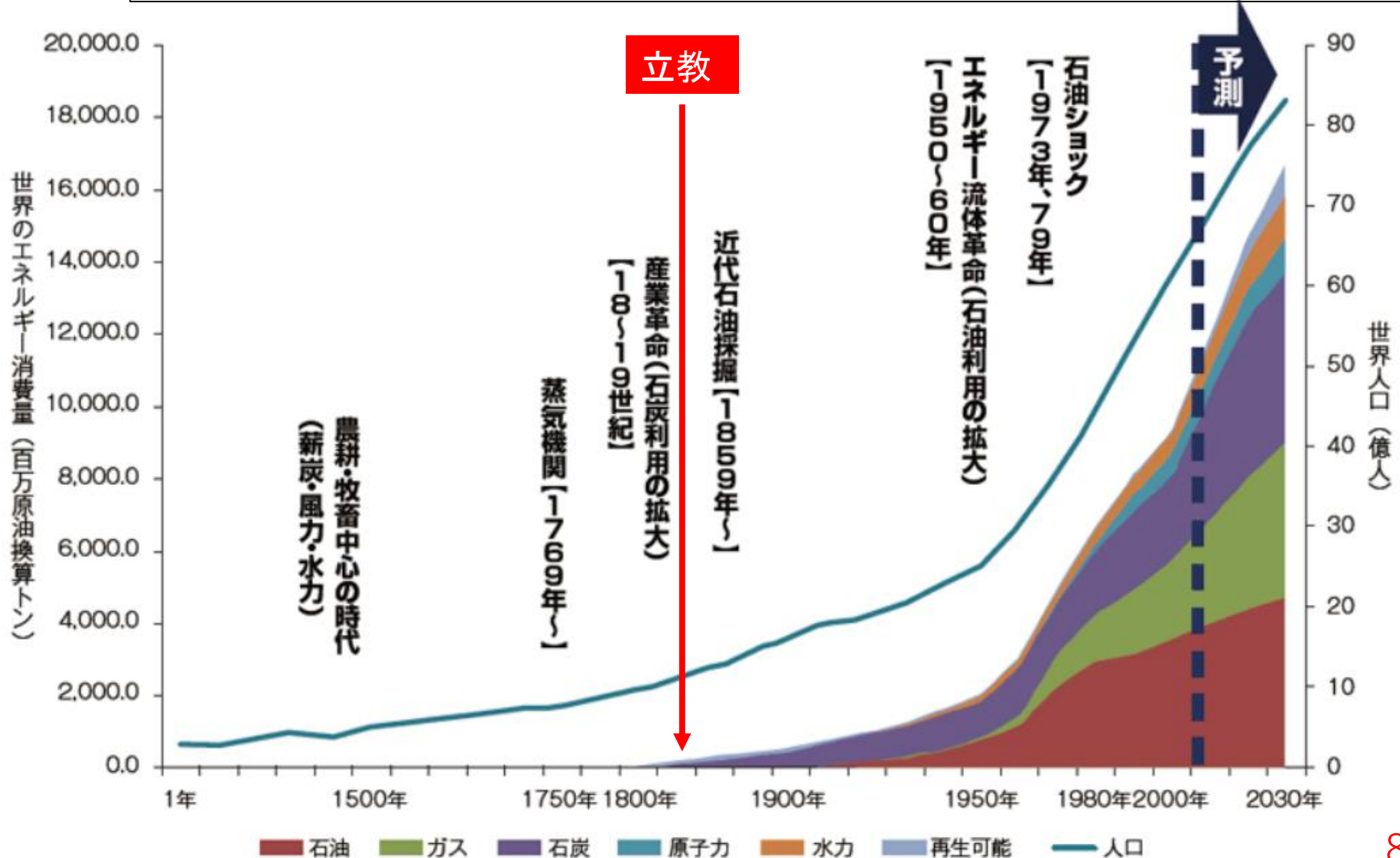
人類の経済活動が地球を破壊する

教祖が立教した天保9(1838)年は、ヨーロッパで産業革命が始まり、エネルギー使用が飛躍的に拡大する出発点に当たります。これは見方を変えると、人類が破滅する出発点とも言えます。

人新世（じんしんせい、ひとしんせい、）とは、人類が地球の地質や生態系に与えた影響に注目して提案されている、地質時代における現代を含む区分である。人新世の特徴は、地球温暖化などの気候変動、大量絶滅による生物多様性の喪失、人工物質の増大、化石燃料の燃焼や核実験による堆積物の変化などがあり、人類の活動が原因とされる。
 （『ウィキペディア』より）

【第111-1-1】 世界のエネルギー消費量と人口の推移

経済産業省資源エネルギー庁「平成24年度エネルギーに関する年次報告」（エネルギー白書2013）



近代化による経済成長は、二酸化炭素の増加を招き、気温の上昇によって、人類の繁栄の基盤を切り崩しつつあると『人新世の「資本論」』は主張します。

人類の経済活動が地球に与えた影響があまりに大きいため、ノーベル化学賞受賞者のパウル・クルツェンは、地質学的に見て、地球は新たな年代に突入したと言い、それを「人新世」と名付けた。人間たちの活動の痕跡が、地球の表面を覆いつくした年代という意味である。／ 実際、ビル、工場、道路、農地、ダムなどが地表を埋めつくし、海洋にはマイクロ・プラスチックが大量に浮遊している。人工物が地球を大きく変えているのだ。とりわけそのなかでも、人類の活動によって飛躍的に増大しているのが、大気中の二酸化炭素である。

ご存じのとおり、二酸化炭素は温室効果ガスのひとつだ。温室効果ガスが地表から放射された熱を吸収し、大気は暖まっていく。その温室効果のおかげで、地球は、人間が暮らしていける気温に保たれてきた。

ところが、産業革命以降、人間は石炭や石油などの化石燃料を大量に使用し、膨大な二酸化炭素を排出するようになった。産業革命以前には280ppmであった大気中の二酸化炭素濃度が、ついに2016年には、南極でも400ppmを超えてしまった。これは400万年ぶりのことだという。そして、その値は、今この瞬間も増え続けている。

400万年前の「鮮新世」の平均気温は現在よりも2～3度高く、南極やグリーンランドの氷床は融解しており、海面は最低でも6m高かったという。なかには10～20mほど高かったとする研究もある。

「人新世」の気候変動も、当時と同じような状況に地球環境を近づけていくのだろうか。人類が築いてきた文明が、存続の危機に直面しているのは間違いない。

近代化による経済成長は、豊かな生活を約束していたはずだった。ところが、「人新世」の環境危機によって明らかになりつつあるのは、皮肉なことに、まさに**経済成長が、人類の繁栄の基盤を切り崩しつつある**という事実である。（『人新世の「資本論」』P4. 斎藤幸平. 集英社新書. 2020）

近年SDGs(持続可能な開発目標)が叫ばれているが、科学技術の進歩は留まることを知らず、自然環境の破壊はますます広範囲にわたり、生態学的な危機に加えて地球温暖化による異常気象が山火事や大洪水などをもたらして世界の各地に被害を拡散させており、時には火山が爆発したりと、まさに「てんび火のあめうみわつなみや」(六 116)と仰せられるような様相を呈している。

さらには、人間の活動領域が自然界の深部に達した結果、新型コロナウイルスのパンデミックを引き起こし、その結果、生きるための活動がいろいろと制限されるどころから、社会的経済的な衰退を余儀なくされるばかりでなく、危機においてこそ必要な「相互扶助の精神」を忘れて疑心暗鬼に陥り、人心を荒廃させる危険にも曝されやすくなる。(「元初まりの話」P27)

自然環境の破壊に対して、国連を中心にして、SDGs(持続可能な開発目標)の推進が図られていますが、社会は着実に「てんび火のあめうみわつなみや」の状態になりつつあると橋本氏は言っています。

「おふでさき」6号のこの部分が書かれたのは、明治7年陰暦12月頃です。この年、大和神社へご神体のことで弟子を問答に行かせたことが発端になった一連の動きで、県の社寺掛から教祖が山村御殿に呼び出された後、「神を拝むなら、大社の神を拝め(稿本P121)」と信仰を差し止められたあとです。信仰＝「たすけ一ぢよ(助け一条)」が止められ、その結果として世界は「てんび火のあめうみわつなみや」のような状態になると言われたのです。まさに「相互扶助の精神」＝「たすけ一ぢよ(助け一条)」が止められたことに対する怒りの表現です。

- 「おふでさき」6号
- 113. このたびはなにか月日のさんねんを つもりあるからみなゆうてをく
 - 114. このところたすけ一ぢよとめられて なんてもかやしせずにいられん
 - 115. このかやしたいしや高山とりはらい みな一れつハしよちしていよ
 - 116. このはなしなんとをもふてきいている てんび火のあめうみわつなみや
 - 117. こらほどの月日の心しんばいを せかいぢうハなんとをもてる
 - 118. たん／＼とくどきなけきハとくけれど しんぢつなるの心たすける
 - 119. どのよふなものも一れつハかこなり 月日の心しんばいをみよ
 - 120. このよふハ一れつハみな月日なり にんけんハみな月日かしもの
 - 121. せかいぢうこのしんぢつをしりたなら ごふきごふよくだすものわない
 - 122. こゝろさいしんぢつよりもわかりたら なにもこわみもあふなきもない
 - 123. 月日よりをしゑる事ハみなけして あとハにんけん心ばかりで
 - 124. いまゝでもこのよはじめたしんぢつを をしへてをことをもたなれども
 - 125. 月日よりにち／＼心せきこめど こくけんまちているとをもゑよ
 - 126. このはなしなんとをもふてきいている 月日をもわくふかいりやくを

SDGs 持続可能な開発目標 (SDGs: Sustainable Development Goals) とは、2001年に策定されたミレニアム開発目標 (MDGs) の後継として、2015年9月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない (leave no one behind)」ことを誓っています。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル (普遍的) なものであり、日本としても積極的に取り組んでいます。

SDGsは、企業にとっては「社会問題や環境問題の解決に役立つビジネスへの進化」として受け取られています。気候変動対策が新たな経済成長の「チャンス」とみなされているのです。このような現状を『人新世の「資本論」』は「丸い三角を描くようなもの」と表現しています。



現代社会は、社会問題や環境問題の深刻化～例えば自然災害の大規模化や感染症によるパンデミック、少子高齢化による市場の縮小と労働力不足など～によって、その持続可能性を脅かされています。これは、企業のビジネス環境の持続可能性も脅かされていることを意味します。／ だからこそ、企業は規模の大小や業種に関わらず、SDG sの実現に向け本業のプロセスでこれらの問題に取り組むこと、つまり「**社会問題や環境問題の解決に役立つビジネスへの進化**」が、自社の「生存戦略」として不可欠になっています。もはや社会問題や環境問題は「自社に無関係」でも「国や地方自治体などが何とかしてくれる」問題でもなく、自社の持続可能性を左右する「経営課題」となっています。／ 社会問題や環境問題を経営課題として取り組むには、従来のビジネス観を改め、「従来ビジネスとは関係ないと思い込んでいたこと」にも積極的にチャレンジする必要があります。チャレンジの多くは企業にとって未経験の取り組みになるものの、同時に成長とリスク低減をもたらす試みにもなるでしょう。（『SDG s 実践入門－中小企業経営者&担当者が知っておくべき85の原則』P3. 泉貴嗣. 技術評論社. 2021）

その「以後の砦」の旗印になっているのが、「SDGs」だ。国連、世界銀行、IMF（国際通貨基金）、OECD（経済協力開発機構）などの国際機関もSDGsを掲げ、「緑の経済成長」を熱心に追求しようとしている。／ 例えば、イギリスや韓国を含む七ヶ国によって設置された「経済と気候に関するグローバル委員会」は、「ニュー・クライメイト・エコノミー・レポート」を発行している。そのなかで、「急速な技術革新、持続可能なインフラ投資、そして資源生産性の増大といった要素の相互作用によって、持続可能な成長は推し進められる」とまとめ、SDGsを高く評価している。そして、「私たちは、経済成長の新時代に突入している」と謳いあげた。エリートたちが集う国際組織において、**気候変動対策が新たな経済成長の「チャンス」とみなされている**のが、はっきりとわかるだろう。／ 実際、フリードマンやリフキンの提唱する気候ケインズ主義が、さらなる経済成長を生み出すのは間違いない。太陽光パネルだけでなく、電気自動車とその急速充電器の普及、さらには、バイオマス・エネルギーの開発など、経済の大転換が必要になり、そのためには多くの投資と雇用創出が欠かせないからである。そして、気候危機の時代には、既存の社会インフラ全体を丸ごと転換するような大型投資が必要だという主張も、まったくもって正しい。／ だが、それでも問題は残る。それが果たして、地球の限界と相容れるのかどうか、という疑問が湧いてくるからだ。「緑」と冠をつけたところで、**成長を貪欲に限りなく追求していけば、やがて地球の限界を超えてしまうのではないか**。（『人新世の「資本論」P61）

「資本主義」と「脱成長」は両立不可能

資本とは、価値を絶えず増やしていく終わりなき運動である。繰り返し、繰り返し投資して、財やサービスの生産によって新たな価値を生み出し、利益を上げ、さらに拡大していく。目標実現のためには、世界中の労働力や資源を利用して、新しい市場を開拓し、わずかなビジネスチャンスも見逃してはならない。／ ところが、資本主義が世界中を覆った結果、人々の生活や自然環境が破壊されてしまった。だから、**脱成長は、この行きすぎた資本の運動にブレーキをかけ、減速しようとするのである**。／ ここで、旧来の脱成長派は、こう言うだろう。資本主義の矛盾の外部化や転嫁はやめよう。資源の収奪もなくそう。企業利益の優先はやめて、労働者や消費者の幸福に重きを置こう。市場規模も、持続可能な水準まで縮小しよう。／ これはたしかにお手軽な「脱成長資本主義」に違いない。だが、ここでの**問題は、利潤追求も市場拡大も、外部化も転嫁も、労働者と自然からの収奪も、資本主義の本質だということだ**。それを全部やめて、減速しろ、と言うことは、**事実上、資本主義をやめろ、と言っているのに等しい**。／ 要するに、**利潤獲得に駆り立てられた経済成長という資本主義の本質的な特徴をなくそうとしながら、資本主義を維持したいと願うのは、丸い三角を描くようなものである**。まさに、真の「空想主義」である。これが旧世代の脱成長論の限界なのだ。（『人新世の「資本論」』P132）

橋本氏はここで「元初まりの話」に目を向けます。ここで登場するのが、国文学者の益田勝実氏です。同氏は「元初まりの話」に強い関心を示し、教内の本にも文章を寄せています。

【存在への勇気・碩学の見解】

いまや人類は、自然世界からの逆襲にたじろぎ、「末世」を思わせる状況に立ち至っているが、「にもかかわらず」長い生命の歴史を受け継いで、この世に生を受けたお互いは、これまでも時には絶滅に瀕するような危機的状況や難渋な道筋をも、親神様の温かい親心に抱かれ、お連れ通りいただいていたのである。この真実が分かれば、今ここに存在していることの有り難さがしみじみと感じられるようになり、「存在への勇気」が湧いてくる。／ 1957年の『こふきの研究』公刊を契機に、元初まりの話と出合って衝撃を受けたという**益田勝実氏**は、その著『火山列島の思想』（1968年・筑摩書房）において、元初まりの話の特異性を縷々(るる)論じているが、1978年に刊行された『ムック天理Ⅱ 人間誕生』（道友社）に、「根源を問い、根源を答える」という一文を寄せ、その中で「なんとも驚くほかない壮絶さで、**強靱な不撓(とう)不屈の人間誕生への努力**が語られる。残酷なまでに生まれては滅び生まれては滅びの、滅亡の物語だが、そのプロセスの果てに、こうして人間としていま生きていることになる自分を、不思議なまでに力づけてくれる」と、心情を吐露している。（「元初まりの話」P28）

月日親神が、泥海のなかで九億九万九千九百九十九年前に人間創造を計画し、三年三月の長い懐妊期ののち、七十五日間も出産（帯屋中）をつづけ、日本全国に最初の生命体九億九万九千九百九十九人を産みおろした、という途方もなく大がかりな想像にあきれるまえに、わたしたちは、それが、それ以後なおどのように出直し出直しして真の人間誕生にまで達するか、人間出現の意義の大きさ、〈人間存在の重み〉を、そのことによってあますところなく語り伝えようとするための、必要不可欠の設定であることに気づくべきであろう。／ 僅か五分の身のたけで生まれた最初の生命群は、九十九年かかってようやく三寸にまで成長したが、そこで全滅した。親神はそれでも断念することなく、次の生命群を準備し、また五分の身のたけで生まれたそれらは、九十九年かかって三寸五分に成長する。二度目は、五分だけ大きくなりまさったのだが、それらもまたそこで全滅してしまう。三度目も五分から出発し、九十九年かかって四寸までになって全滅する。／ 九億九万九千九百九十九の生命が、生まれて九十九年間も成長の努力を尽くしては、ことごとく滅ぶことのくりかえし……それでも、そのたびに少しずつ身のたけを伸ばした、という。なんとも驚くほかない壮絶さで、**強靱な不撓(とう)不屈の人間誕生への努力**が語られる。**残酷なまでに生まれては滅び生まれては滅びの、滅亡の物語**だが、そのプロセスの果てに、こうして人間としていま生きていることになる自分を、不思議なまでに力づけてくれる。（「根源を問い、根源を答える一天理教祖の神話創造」益田勝実、『ムック天理Ⅱ.人間誕生』P174.道友社.1978）

次に橋本氏が紹介するのは地質化学者の原田憲一氏です。原田氏は別の著作の中で、「現在の環境悪化や資源涸渇を前にして、遠からず人類は死滅する」と述べ、それを防ぐためには、「地球の動きの理解に努め、それと調和した生きかたを追求するのが一番妥当な道」と続けています。40億年、あるいは9億9万年という長いスパンで人間を考えた場合、地球(自然)に合わせた生き方を考えざるを得ないのです。

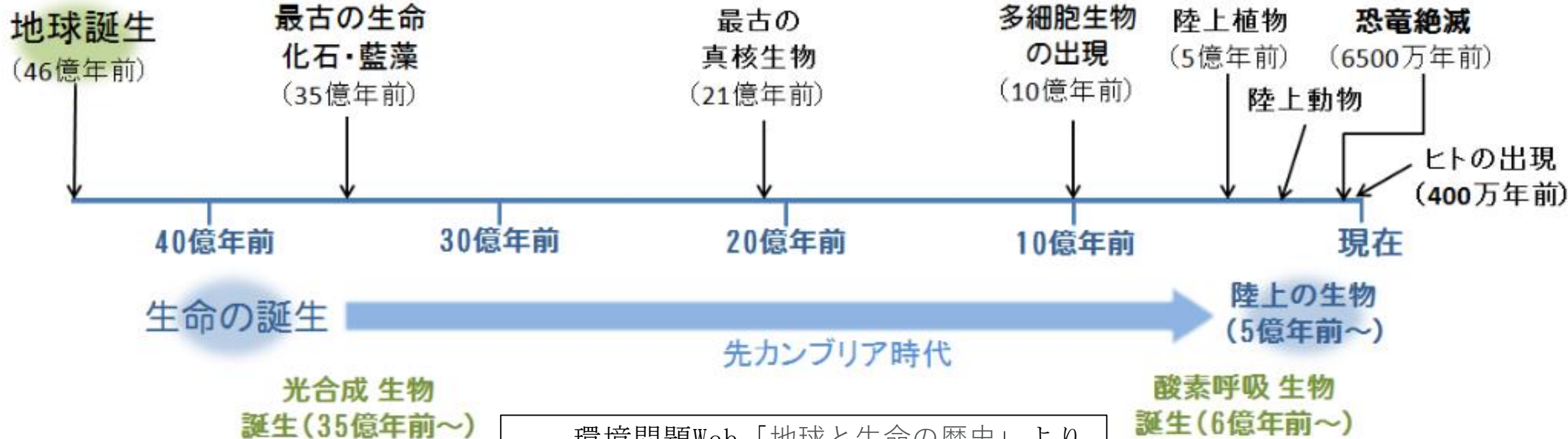
原田憲一氏は、2002年に公刊された『二十一世紀のエネルギー選択』（京都フォーラム編）で、「1億年後からみた現代文明の意義 地球46億年の歴史の中に生きる私たち」というテーマのもと、「西欧人は動植物を上等下等に区別していきました。しかし約100年前に天理教の教祖は『生き物は全て一列兄弟』だと教えました」と述べ、生物界の掟は「弱肉強食」ではなく「共存共栄」であること、それゆえ人間の一人勝ちは、当然、地球全体の生態系を狂わせてしまい、やがて人間の総崩れになると指摘する一方、人間の環境破壊程度では、地球の環境を維持し生き物を育てている「天」(大気)－「地」(岩石)－「水」の循環は基本的に変わることはないと主張している。／ さらに、40億年の生命の歴史の中で、これまで天変地異や気候変動により生存環境が激変することが何度もあったが、その都度、生き物は必死に生き延びて命をつないできた。人間も、この長い生命の歴史を受け継いで次世代にバトンタッチする義務があると力説し、そのために「親は子供に『お前は生きていていいんだ。お前が生きることがお父さんお母さんの喜びなんだ』と伝えなくてはいけない」と、教育論としても示唆に富む言辞を著している。（「元初まりの話」P28）

白亜紀末に地球環境（気候）が大きく変化したことは間違いない。それは隕石の衝突で一瞬にしてもたらされたものかも知れないし、100万年の単位でじわじわと実現したのかも知れない。しかし、新生代に入ると、短期間に環境は安定化し、生命に新しい生存の場を提供した。これも、地球環境の調節は、基本的に、無機的な物質循環が担っている証拠と言えよう。そうした観点から、この時代の地層を研究してみることは重要である。／ ところで、現在の環境悪化や資源涸渇を前にして、遠からず人類は死滅するだろう。もしも核戦争が起これば、一瞬のうちに地球が破壊され、人類は他の生命とともに消滅してしまうだろう。こうした悲観的な判断から、どうせ終わりになるなら、今のうちにできるだけ楽しんでおこうと、刹那的な行動に誘惑される人がいるかも知れない。しかし、上で述べたことからすれば、その判断は明らかに間違いだ。すなわち、たとえ核戦争が起これば、地上の生命が全て絶滅することはない。人類が全滅することもない。何割かは生き残って破壊された環境下で生活しなければならないだろう。運悪く生き延びた人間は、地獄の苦しみを味わいながらも、生き続けねばならない。核戦争が無くても、原発事故で放射能汚染が広がったり、ハイテク汚染で環境が破壊されれば、現在の文明は失われて、やはり、地獄の苦しみを味わうことになるだろう。そうした不運を避けるためには、一人ひとりの人間が、地球の動きの理解に努め、それと調和した生きかたを追求するのが一番妥当な道だと考えられる。（『地球について』P244. 原田憲一. 1990. 国際書院）

地球の歴史と人の歴史の長さ

46億年の地球の歴史からここ数百年の人間の動きを見たとき、その短さに気付かずにはおられません。

地球と生命の歴史



白亜紀（はくあき、白堊紀、Cretaceous period）とは、地球の地質時代の一つで、約1億4,500万年前から6,600万年前[1]を指す。……温暖な気候と高海水準とで特徴付けられる時代である。…隕石の落下が引き起こした気候変動が、白亜紀末の大量絶滅に関係しているという学説は、現在では地質学者、古生物学者等の間で広く支持されている。（ウィキペディアより）

新生代（しんせいだい、英: Cenozoic era）は、古生代・中生代・新生代と分かれる地質時代、顕生代の大きな区分の一つである。多くの場合は鳥類を除いた恐竜絶滅後を指す。約6,500万年前から現代までに相当し、陸上では鳥類型恐竜が絶滅し^{[1][2]}、海中ではアンモナイトと海生爬虫類が絶滅した後^[3]、哺乳類が繁栄したことで特徴づけられる。（ウィキペディアより）

はじまったものは必ず終わる

日本のマルクス研究者として最重要人物のひとりである宇野弘蔵は、『資本論』が孕み持っているこの二面性について、「『資本論』には二つの魂がある」ととらえています。／ 「二つの魂の一つは科学的な資本主義分析（マルクス経済学）。もう一つは革命のアジテーション（史的唯物論）。これらはどこまでいっても相容れないものなので、どちらかをとり、どちらかを捨てなければならぬ」と、宇野は考えた。／ そして宇野は、「科学としての経済学にこそ、『資本論』の偉大さがある。革命のアジテーションという観点から『資本論』が特別に偉大というわけではない」という視点から、「科学としての経済学」を取り出す一方で、史的唯物論は捨象するという判断を下したのです。……

『資本論』を「科学としての経済学」として捉えた研究が、「マルクス経済学」と言われる経済学です。ではそれはどんな経済学で、他の経済学と何か違うのでしょうか。／ マルクスはアダム・スミスやデヴィッド・リカードを熟読し、それを批判していきました。スミスやリカードが展開した古典派経済学の考え方の重要な部分は、現在も主流派経済学に受け継がれています。たとえばスミスの経済社会観である「見えざる手」がそうです。「みんなが自分勝手に、自己利益だけを考えて行動していても、あたかも見えざる手に導かれるようにして最良の秩序が導かれる」という考え方です。あるいはリカードが打ち立てた、「自由貿易は正しい」という考え方です。そういう意味で古典派経済学は今も現実の政治経済に反映され続けている、影響力の強い思想と言えます。／ マルクスはこの古典派経済学を読み込んだ上で、批判しているわけです。マルクスにとって資本制社会とは、物質代謝の大半を商品の生産、流通、消費を通じて行なう社会である。それは歴史的に生まれたものである。わずかでも商品が生み出され、交換されていけば、資本主義の萌芽がそこにあるとは言える。だからといって「人間は古代から資本主義者だった」とは言えない。商品や貨幣はずっと昔からあるとしても、それが物質代謝の大半に関与してこないかぎり、マージナルなものにすぎない。

マルクスのクリティカルポイントは、この「資本主義社会の歴史性」と言えます。スミス、リカードらは資本主義経済について、超歴史的な視点で議論を展開している。つまり資本主義を、歴史のある一点で生まれたものとしてではなく、「最初からずっとそうであり、未来永劫そうである」という、あたかも自然のような存在と見なしている。

マルクスに言わせれば、それは違う。資本主義は歴史的な起源を持っている。起源を持つということは終わりもあるということ。スミスやリカードの見方では、資本主義は起源を持たず、永久に続くということになる。「それはブルジョア階級に仕える学説ではないか」ということです。……

その経済学批判は古典派経済学に影響を受けつつ、それを批判しながら、資本主義のメカニズムを分析している。それがマルクスの『資本論』の内容の大半です。マルクスの経済学とは、『資本論』のサブタイトルどおり、正確には「経済学批判」なのです。（『武器としての「資本論」』P254. 白井聡. 東洋経済新報社. 2020）

人間は自然界の子であって自然界の支配者ではない
自然を克服し、あるいは自然に干渉して繁栄するというのは、人間のうぬぼれであり、自己欺瞞である

『土と文明』は、その文明が偉大であればあるほど、自然法則に逆らうことによって没落の原因になるといいます。また、「若干の例外を除いて、文明人は一地方において30～70世代(800～2000年)以上にわたって進歩的な文明を維持することはできなかった」とも言っています。今の資本主義社会といわれる文明も、数百年の歴史しか持たず、過去の事例から考えれば、いつか没落することになります。没落する道をこのまま歩むのか、現状変革へ立ち向かうのかがいま問われています。

人間は開化されていようと、野蛮状態におかれていようと、自然の子あることには変わりはなく、けっして自然の支配者ではない。自然を克服し、あるいは自然に干渉して繁栄するというのは、人間のうぬぼれであり、自己欺瞞である。というのは、文明が進歩するのは、それが宿っている土壌という資源を借用して繁栄したわけで、借用した資源を返済しなければ早晚、元金が枯渇することは自明の理だからである。銀行頂金の収支と同じである。したがって、既往の進歩的文明の存続期間というものは、文明が培養された自然環境の“健全さ”と土壌に宿っている資源の多寡とによって決まる。逆説的にいえば、人類の成就した繁栄が偉大であればあるほど、自然法則に逆らう文明没落の要因になった、と結論づけることができる。

(『土と文明』P318(訳者解説).V・G・カーター/T・デール.家の光協会.1995)

原始人が現れたのはおよそ100万年も前であった。原始人は土壌と動植物の発達の自然過程を覆しはしなかった。原始人も他の動植物と同じく、生きていくためには自然環境にみずからを順応させなければならなかった—ただし、それは他の動植物を支配し、大自然そのものを支配することを十分企てられるほど開化されるまでのことであった。

約6000年前の文明人の出現とともに、彼らが居住していた多くの地域で土壌生成作用が完全に一変した。すなわち、土壌の質と量、および土壌の養っていた多数の生物がすべて衰退に向かった。文明人は彼らの優秀な道具と知能とによって、周辺の動植物の生命の大半を馴化したり、破壊したりすることができた。だが、それよりもっと重要なのは、彼らの改良された道具と技術が、生命を支えてきた土壌の生産力を知らず識らずのうちに破壊する手助けをしていたことである。文明人の知能と英知は、他の動物がこれまでなしえなかったこと、つまり自己の環境を大きく変化させ、しかも、いままでの倍も生き存えることを可能にした。↘

▽ 文明人はいつの場合でも、一時的には自然環境の支配者となることができた。彼らの大きな杞憂は、現世の権力が永久的なものであるという迷妄からもたらされた。文明人は自然法則を十分に理解せずに、己を“万物の霊長”と考えた。人間は開化されていようと、野蛮であろうと、自然界の子であって自然界の支配者ではない。人間が自然環境において支配を保とうとするならば、その行動を一定の自然法則に順応させなければならない。自然法則を出し抜こうとすれば、つねに自己を養ってくれる自然環境を破壊することになる。そして、その環境が急速に悪化すると、その文明は衰亡する。

ある人が歴史を要約して次のように述べた。「文明人は地球の表面を渡ってすすみ、その足跡に荒野を遺していった」と。このことには若干誇張のきらいがあるにしても、根拠がないわけではない。文明人は長年住んでいた多くの土地を収奪した。これがいわば、なぜ進歩的文明があちこちに移動したかという重要な事由である。それが古い安住地において文明人の文明が衰亡した主因であり、また、歴史のあらゆる流れを決める一つの決定的要因であった。（『土と文明』P12）

最近6000年の歴史的記録が示すところによると、若干の例外を除いて、文明人は一地方において30～70世代（800～2000年）以上にわたって進歩的な文明を維持することはできなかった。しかし、三つの顕著な例外がある。ナイル川流域・メソポタミア・インダス川流域であるが、そのことについては後述する。しかしながら、これら文明の発祥地はさておき、文明人の環境の支配は数世代しかつづかなかった。恵まれた環境において発達と進歩が2～3世紀つづくとその文明は衰亡・没落し、新しい土地へと移動せざるをえなかった。短い平均寿命は40～60世代（1000～1500年）であった。文明が輝かしいものであればあるほど、その進歩的な存在が短命だった場合が多い。これらの文明は、それらが培われたと同じ地理的環境で衰微した。というのは、主として文明人自身がその文明の発達に寄与した環境を収奪し、荒廃させたからである。

いかにして文明人が、その恵まれた環境を収奪したか？ 文明人はたいてい、天然資源を枯渇させたり、破壊したりして自然環境を収奪した。彼らは、樹木の密生した山麓や流域から多くの有益な森林を切り倒し、燃やし、家畜を養っている草地に過放牧したり、草地を裸にしたりし、たくさんの野生生物・魚、その他の水生動物を殺した。また、農用地の生産的な表土は土壌浸食によって剥奪されるままに放置され、土壌浸食が沈積土によって流水をせき止め、貯水池・灌漑運河・港を梗塞するのを等閑視した。多くの場合、文明人は容易に採掘できる多くの金属、その他の必要な鉱物を使用し、また浪費した。したがって、その文明は己が創造したものを収奪して衰亡するか、あるいは新しい土地へと移動した。この途をたどって没落したさまざまな文明は10～20あった（その数は文明を分類する人々による）。（『土と文明』P14）

橋本氏は結論として「元初まりの話の現代的な意義」は、「自己変革への勇気」「現状変革へ立ち向かう勇み心」を湧かせることであり、それは「人間世界創造の原理を象った『かぐらづとめの構造』から見えてくる真理」であるからだとしています。天理教徒にとってこれは素晴らしいことです。ただ問題があります。それは、毎月の天理教本部の神殿でつとめられる「かぐらづとめ」は、拝殿に座った状態ではほとんどの人は見るができないということです。また、「かぐらづとめ」とは何か、という説明も行われていません。この現状では、教内の人間が「自己変革への勇気」や「現状変革へ立ち向かう勇み心」を持つことは無理でしょう。

140年祭という旬に際して、天理教は「元初まりの話」の現代的な意義を広く人々に知ってもらうために、「かぐらづとめ」が拝殿から見えるようにする必要があります。また、神殿の周辺にも多くの人が椅子に座って祭典を拝していますから、その人々も見られるような大きなスクリーン等の設置が求められます。そして当然「かぐらづとめ」の理合いを説明するパンフレットの配布なども必要でしょう。

そうすることによって教祖の教えが教祖が身を隠されてから140年を経て復活され、自己変革、現状変革へ進む力が湧いてくるのです。

確かに、人類が今日生存している状況は、この上なく困難な状況である。それでもなお、創造と守護の歴史を振り返るだけでも、長い生命の歴史を受け継いで、今ここに存在していることが有り難く、生きる勇気が湧いてくる。加うるに、いまや世界たすけの新しい歴史、つまり未来へ向けての救済の歴史が始まっているのであり、さらに教祖は世界一れつの胸の掃除を促されるうえから、「いちれつすます」を「いちれつすまして」と、つとめの模様替えまでなされて、それぞれの心の成人を一層積極的にお急ぎ込みになったのである。

このような篤い親心が分かるとき、生かされるに、よりふさわしい成人を目指す自己変革への勇気、陽気ぐらし世界の建設を目指して現状変革へ立ち向かう勇み心が湧いてくる。元初まりの話の現代的な意義は、まさにここに存すると思う所以である。

教祖百四十年祭を迎えるに際して「論達」が発せられ、その精神に沿って年祭活動が展開されることになるが、これまでに発せられた「論達」において、「人をたすける心の涵養」が一つのキーワードとなって活動が推進されてきた。「陽気ぐらし世界」を「全人類が仲良くたすけ合って平和に暮らす世界」と解するならば、「人をたすける心の涵養」こそが必須の科目になり、この科目を履修する確かな道は、実際に人をたすける行いの実践以外にないということになる。これは、いかにも浅薄な結論に思われるかもしれない。しかし、かつて本誌でも、元初まりの話の前半部分から論じた拙論に見るように、実は、それが人間世界創造の原理を象った「かぐらづとめの構造」から見えてくる真理なのである。（「元初まりの話」P29）

現在の神殿の形では「かぐらづとめ」は見られない

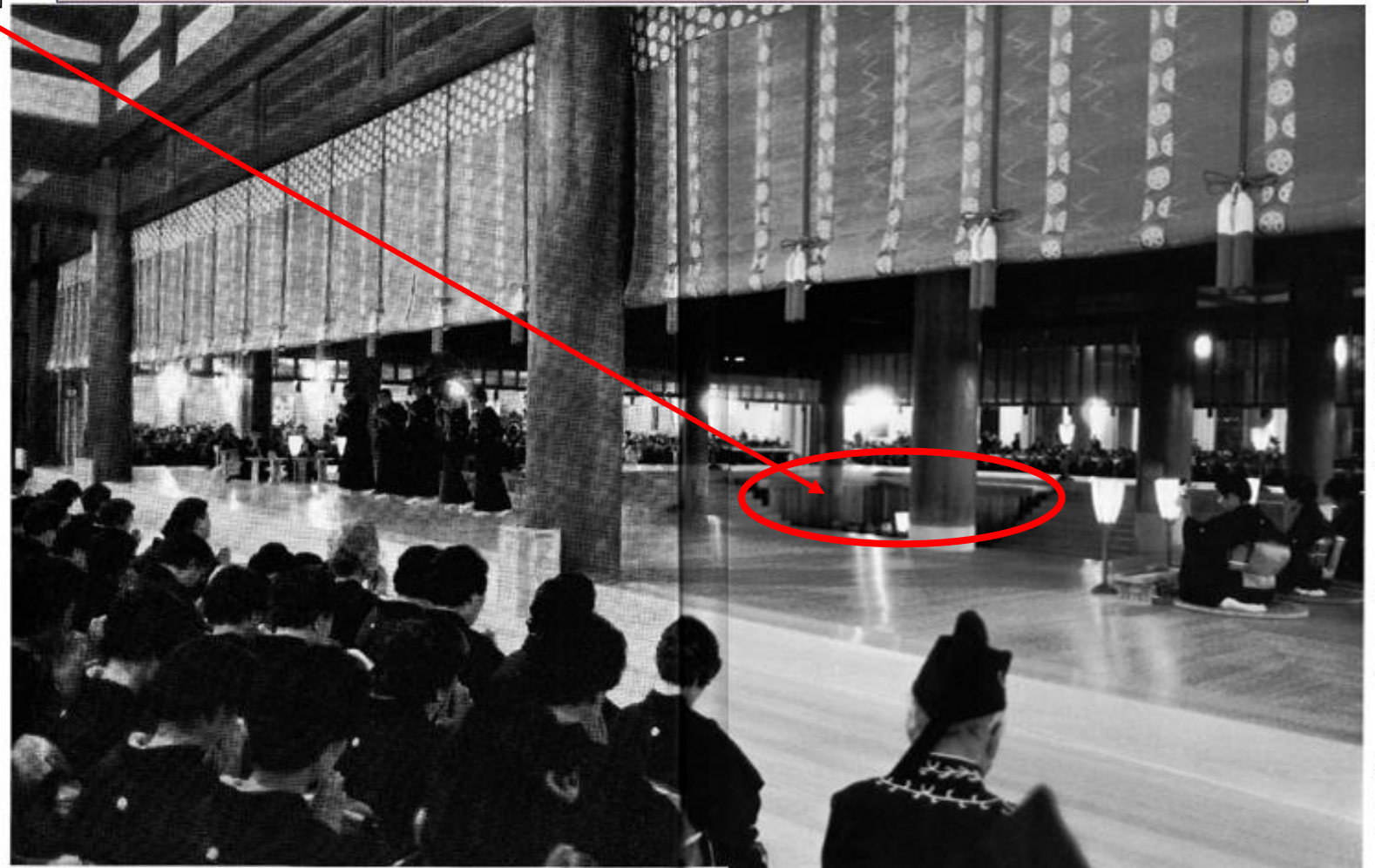
ここで「かぐらづとめ」は行われる。

かぐらづとめは、教会本部神殿中央で行われていますが、周りの上段から深く掘り下げられた位置で行われるため、参拝者からはその姿が見えません。

見えるようにするためには、かぐらづとめが行われる場所を上段のある位置より上にするか、あるいは上段をかぐらづとめが行われる位置まで下げる必要があります。

また、拝殿には入れない人が多数神殿の周辺で参拝していますので、テレビで中継して、大スクリーンでその人たちも見られるようにする必要があります。

現在の天理教教会本部の神殿



「かぐらづとめ」の模型

「かぐらづとめ」にはどのような意味合いがあるのでしょうか。『天理教事典』にはその簡単なやり方は書かれていますが、意味合いは「人間創造のときの再現」とあるのみです。

『天理教事典』には「→元初まりの話」とあるのですが、「元初まりの話」というのは、いろいろな説があって、最初に述べたように、教祖は“それでよい”と仰せにならなかった」という伝承もあり、教祖の「元初まりの話」が確定できていません。

まずこの確定作業が必要です。それは信仰者一人一人の信仰姿勢の問題が問われることなので容易ではないでしょうが、そのような作業の中で、本当の信仰とは何かということも見出すことができるのではないのでしょうか。

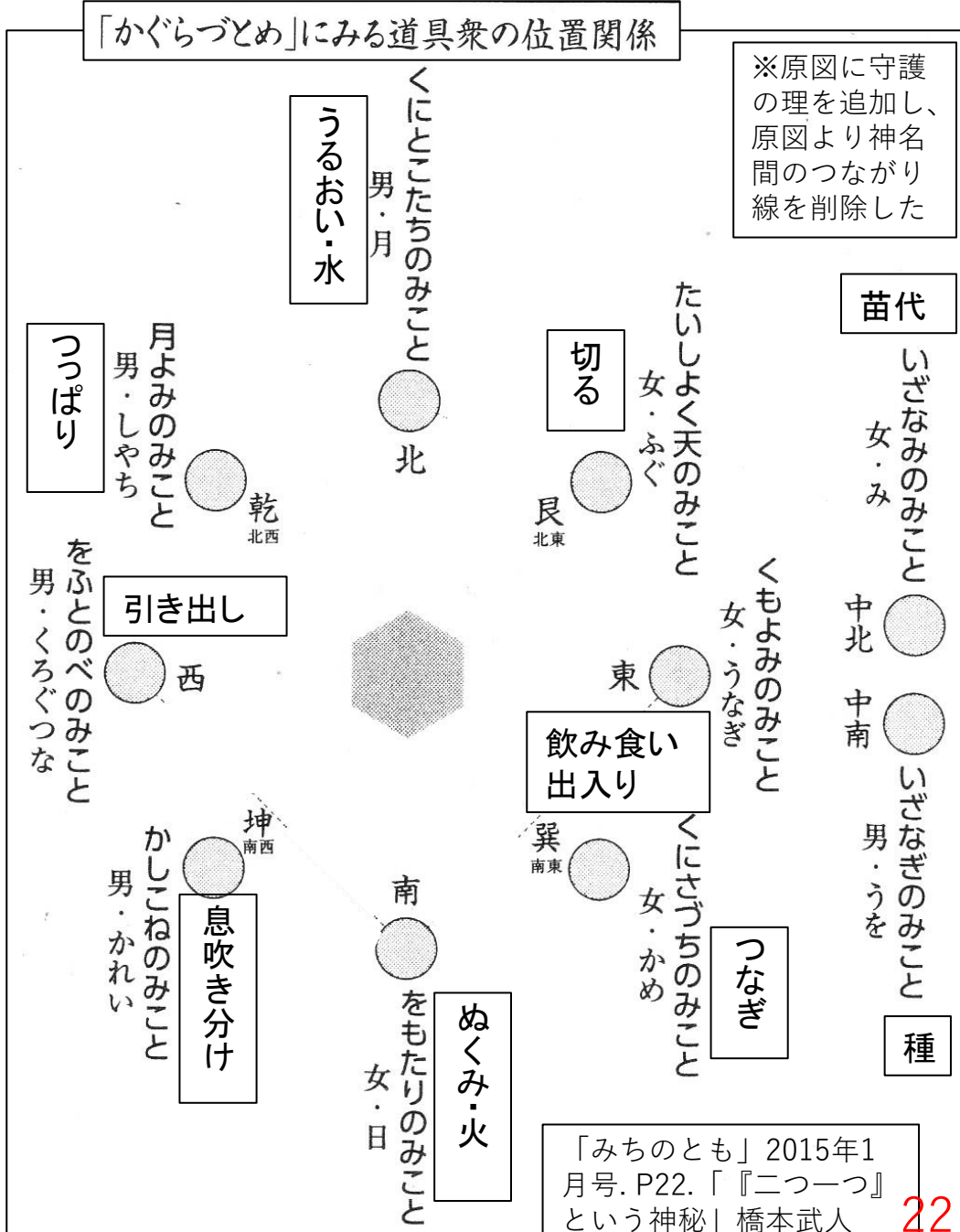
「かぐらづとめ」は、10人の「つとめ人衆」がそれぞれ面をつけ、かんろだいを囲んで勤める。手振りもそれぞれのつとめ人衆が、親神の守護の理を、道具衆としてそれぞれ表現する手振りである。このつとめの姿は、人間の創造のときの様子を再現している（→元初まりの話）。
（『天理教事典第三版』P582）

櫛本分署跡保存会作成



橋本氏は「人をたすける」心を強調しています。

近代化は科学技術の進歩と相まって、物質的には豊かな社会をもたらしましたが、精神的には貧しくなり、揚げ句の果てに、私たちは自然破壊と人間疎外の諸現象に悩まされています。このような近代化の負の所産に対して、二十世紀の半ばあたりから「東洋の精神に学べ」とか「アニミズムの再評価」など、ポストモダンの批判的な言辞が目立つようになりましたが、残念ながらその具体的な方策なり行動指針が示されないため、事態は一向に改善されません。／ かくて私たちはいま、我さえ良くば、いまさえ良くばという利己主義、刹那主義の精神が充満し、公共の精神がますます希薄化した状況、個人間の衝突はもとより、国家や民族など集団間の衝突、さらには文明の衝突が現実化した状況のなかで生きています。これはまさしく「ほこり」まみれの世界であり、全人類が仲良くたすけ合って平和に暮らす陽気ぐらし世界から最もかけ離れた所に位置しているといえるでしょう。－中略－ 陽気ぐらし世界の建設に必須の相互扶助の文化文明が成り立つためには、主体（自己）にとっては客体（他者）を扶ける資質が備わっていなければならない、その根底においては人をたすける心が涵養されていなければなりません。実際、親神様も私たちが人をたすける心を欠落させていることを嘆かれ、心の入れ替えを促されています。ところが人間中心、さらに自己中心に傾きがちではこりまみれになりやすい現今の風潮のなかでは、心のほこりを払い利他の精神を育てることがそれだけ困難になっています。／ 自己中心の心を他者中心の心と入れ替えるためには、ただ沈思黙考しているのではなく、人をたすける行いを実践することが必要になります。心はまだ他者中心の心に成人していなくても、「小さな親切」「地球にやさしい行動」という言葉があるように、小さなことから誰でも日々の生活の中で人をたすける行いを実践することができるでしょう。／ 日常の世俗的な行為であれ、人をたすける行いのただ中であっては、我を忘れていくことが多く、少なくともその間は自己中心の意識、ほこりの心遣いから解き放たれていることとなります。また、世のため人のために何か善い行いをしたときには、自然に心がすがすがしく晴れやかになります、それはまさにほこりが払われ、心が澄むようになった証しなのかもしれません。（「みちのとも」2015年1月号. P24. 「『二つ一つ』という神秘」橋本武人）



教祖は神憑りで悟ったのではありません。教祖は子供の頃から馴れ親しんできたマンダラの世界を説いたのです。／ 教祖の生家三味田のすぐ傍に長岳寺があり、その参道の入り口に五智堂があります。／ この五智堂はマンダラを表しています。／ 一本の柱で大日如来を表わし、四仏の額が付いています。マンダラを象徴しているのです。教祖はこのような所で育ったのです。

マンダラと教祖の教えがどれだけ違うのかを比較してみます。／ 同じものでも東西南北から見るとみる角度が違って来ます。／ マンダラでは、東は日が昇る所で入信、発心と説かれています。／ 南は修行、財福、活動です。／ 西が菩提、知恵、悟りです。／ 北がねはん寂静です。修業の順番を示していると説かれています。／ そして、それぞれに、力、財福、知恵、作用と説かれています。／ 北のねはんというのは冷静です。ねはん寂静というのはすいきです。／ 南の修業、財福というのはぬくみです。／ マンダラでは四仏の間に四菩薩が配置されています。／ 西南が文殊菩薩で知恵を表わしてして、東北の弥勒菩薩は未来を表わしています。／ 教祖は、知恵が発達すると分裂して次の生命が生まれると説きました。教祖がかぐらづとめで示した意味も角度も同じなのです。／ 東南の普賢延命菩薩に対応するのは西北の観音菩薩で、大慈大悲の観世音になっているのです。命存えるためには慈悲の心を持つということです。／ マンダラではこのように説かれています。／ 教祖は、延命をつなぎ、大慈大悲の観世音をつつぱりと説いたのです。／ 生命体の身体の調和を理解するには教祖の説きの方がわかりやすいと思います。心と身体、両方の世界を理解しやすいと思います。／ 特に、身体や物の世界ではつなぎに対してつぱりがなければ形が安定しません。／ そして、マンダラの入信と悟りを、教祖は飲み食い出入りにふさわしい成長という代謝作用と説いたのです。／ 弘法大師の時代から千年を経て、教祖が身体の働き、心の働きを説明したのですが、言葉を変えて説明したことが千年間の値打ちだと思えます。教祖の説き方はわかりやすいのです。

つとめ人衆につけられた神名について捉え直してみたいと思えます。／ 大慈大悲に観世音とか、延命に普賢という菩薩の名前を配したように、秀司さんがつとめ場所に天輪王明神として天皇家の先祖の神を導入したので、教祖は、あんなのは神様ではない。天皇の先祖もたすけ合うべき人間だと、みことを外し、つとめ人衆の役割名として名付けたのです。／ かしこねという名前は知恵を思わせるので、言葉を意味する息吹き分けの働きに当てたのです。／ 知恵が発達したら分裂して新しい生命が生まれる働きにというように、役割名として神名を配したのです。／ これは、神名であって神様ではないのです。／ このお道は一に くにとこたちのみことさま 二に おもたりのみことさま と言ったら十柱の神々で、天皇家の先祖の神々を祭る神道です。

やはり、正確に理解させるためには、すいきの御守護、ぬくみの御守護、つなぎの御守護、つぱりの御守護というようにいうのが本当と思えます。／ どんな神名でも、神名は問題ではない、働きの調和としてみるべきだと捉えると、大変よくわかってくると思えます。（『ほんあづま』321号. P18. 八島英雄. 1995）

八島氏が、教祖が「かぐらづとめ」のヒントを得たという五智堂です。この「方一間の小さい建物」は、飯降伊蔵から社の寄進の申し出を受けた際の教祖のことは、「一坪四方のもの建てるのやで、一坪四方のもの建家ではない」(『稿本教祖伝』P54)に通じるのではないかと思います。

長岳寺五智堂

教祖が生まれた三昧田から南方1kmほどのところにあります。



2017.10.27 08:28



2017.10.27 08:26

長岳寺の飛地境内に建つ、方一間の小さい建物である。中央には太い心柱を立てた極めて珍しい構造で、俗に真面堂とも呼ばれ、『大和名所図会』では傘塔と記している。心柱は樺材を用いた丸柱で、その四方には受木を出し、梵字をきざんだ額を掲げている。額の梵字は、南に宝生如来、北に不空成就如来、東に阿闍如来、西に無量寿如来を表し、心柱を大日如来に見立てている。建立年代は明確ではないが、鎌倉時代末期と考えられ、長岳寺の伽藍から離れた街道沿いに建てている事にも重要な意義を持つものと思われる。そのため参詣人や街道の通行人の恰好の目印となり、親しまれてきた。なお、大正七年に解体修理を受けている。

天理市教育委員会

長岳寺五智堂(重要文化財)

明治四十一年四月二十三日指定